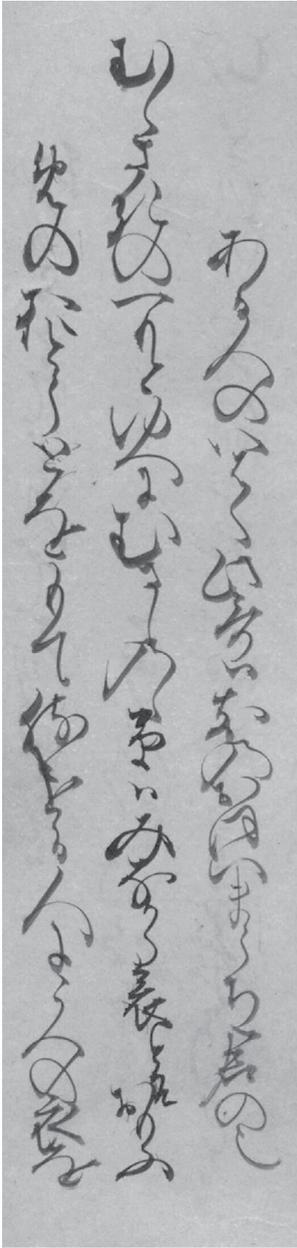


## はじめに

武蔵野書院から上原作和『みしやそれとも 考証——紫式部の生涯』が刊行され、私のところへも、著書の上原氏から謹呈本が届いた。裏表紙を見ると、中村珠凜氏による「紫のひとと故にむさしの、草はみながらあはれとぞおもふ」（傍点笹川）という揮毫があった。『古今和歌集』の一首である。「武蔵野書院（創業者 前田信）・紫乃故郷舎（創業者 前田吉夫）の社名はこの歌にちなむ」というコメントが目にとまった。

古典中の古典ともいふべき『古今和歌集』を読む者なら、あはれとぞ見るといふ結句が思い浮かぶはずで、「あはれとぞおもふ」という本文には、多少の違和感を覚える人も多いに違いない。

武蔵野書院や上原作和・中村珠凜両氏の名誉のために言っておくと、その違和感は誰かの誤りに由来するものではない。例えば、次に挙げた鈴鹿文庫本『古今和歌集』の影印を眺めてほしい。



当該歌の前の歌の左注と後の歌の詞書の一行目を含めて掲げたが、当該歌は、

むらさきの一もとゆへにむさしの、草はみながら哀とぞおもふ

と書かれているのが確認できる。

鈴鹿文庫は、卜部神道家の鈴鹿三七（京都市左京区）の旧蔵書。昭和五十二年から五十三年にかけて愛媛大学が購入、一部は寄贈もされ、現在は愛媛大学図書館が貴重図書として所蔵している。神道関係が中心だが、国学関係や和歌、物語などにも及ぶ七千冊以上のコレクションである。

久曾神昇『古今集古筆資料集』（一九九〇年・風間書房）によると、曼殊院本や志香須賀文庫本も「あはれとぞおもふ」の本文であるし、西下経一・滝沢貞夫『古今集校本』（新装ワイド版二〇〇七年・笠間書院）によると、雅俗山莊本もその仲間に加わる。静嘉堂文庫片仮名本には「ミル」の本文に「オモフ」と異本本文が傍記されている。このように「あはれとぞおもふ」は、由緒ある本文だったのである。

しかし、定家本が絶対視されて貞応二年定家本が流布本となっていく過程で、中世以降の日本人は知らず識らず定家本に依拠して『古今和歌集』を享受することになった。

おそらく、武蔵野書院の創業者も「あはれとぞ見る」の本文で『古今和歌集』を読んでいたかと私には思われるのであるが、「あはれとぞ思ふ」の本文で読んでいた可能性も排除できない。

したがって、誤りとは言えないのである。

ただし、上原作和・中村珠渌両氏が何故「見る」ではなく「おもふ」の本文を採用されたのか、その理由は語られず不明である。

この一首の本文をもう少し詳しくみておこう。

『古今和歌六帖』第五「むらさき」には、

むらさきのひともとゆゑにむさしののくさはなべてもなつかしきかな（三五〇〇）

という本文で同歌が収録されていて、下の句の本文はやや不安定だった可能性がある。

清輔本の『古今和歌集』諸本は「あはれとぞみる」だが、清輔の歌学書では、保延元<sup>1135</sup>年〜天養元<sup>1144</sup>年成立（ただし異説あり）とされる『奥義抄』には「あはれとぞ思ふ」（二九〇）、仁安年間（<sup>1166</sup>1169）以前成立とされる『和歌初学抄』では「あはれとぞみる」（一三四）の本文が立てられていて、下の句の本文は必ずしも安定していたわけではない。

平安末期になると、『源氏物語』の表現が踏まえている古歌を指摘する注釈書が現れるが、藤原伊行『源氏釈』に引かれるのは、「むらさきのひともとゆゑにむさしののをむつましみあはれとぞおもふ」（椎本・三二四、『源氏釈諸本集成』所収の書陵部本による）の本文だが、鎌倉中期に成立する素寂『紫明抄』になると「紫のひともとゆゑにむさしののくさはみながらあはれとぞ見る」（東屋・九五九、角川書店刊『紫明抄・河海抄』<sup>165</sup>165頁による）の本文となる。

貞応二年定家本『古今和歌集』が流布本として位置付けられるのに合わせて、本歌は「あはれとぞ見る」の本文で安定してゆくということなのであろう。

本論に入る前に、かかる一例を挙げて私が確認しておきたかったのは、定家登場以前の『古今和歌集』の本文は、現在流布している『古今和歌集』の本文と同じではないということである。そんなことは研究者にとって常識である。しかし、『古今和歌集』成立から定家が登場する以前の古典作品、例えば『源氏物語』を読む際にも、右のような常識をもっているはずの研究者が、安易に伊達家旧蔵定家自筆本を底本とする『新編国歌大観』CD-ROMで検索し、それ以上の吟味を加えずに済ませているケースがままあるのでないか、と私を含めて反省しなければならないと思うので

ある。

『古今和歌集』の本文研究史のなかで、私たちは久曾神昇『古今和歌集成立論』や西下経一『古今集の伝本の研究』などの大きな成果を手に入れた。しかし、その後『古今和歌集』の本文研究は停滞期にあると感じるのは私だけであろうか。若い研究者には、片桐洋一『平安文学の本文は動く写本の書誌学序説』（二〇一五年・和泉書院）を勧めたい。とにかく具体的にわかりやすく面白い。

私は、久曾神昇『古今集古筆資料集』と西下経一・滝沢貞夫『古今集校本』（新装ワイド版）を座右に置き、特に後者には、対校に用いられていない古写本や古筆切に出会う度、丁寧と比較して書き込むこと、対校に用いられている七十の諸本についても再度比較し、欠脱を補うこと、それらは翻刻本文ではなく、影印に当たって確認することを自分に課してきた。

今回、その中から注目される本文異同をもつ百首を選び、それぞれ一枚ずつ古写本や古筆切の影印を掲げ、できるだけ具体的に流布本との異同を確認し、定家本『古今和歌集』の本文を相対化してみたいと考えた。

その動機となったのは、古筆切周辺について多くのご教示を賜った故田中登先生の学恩に何か報いる方法はないかと考えたことと、研究者の世代交代のなかで古典中の古典『古今和歌集』の研究進展に少しでも刺激が与えられたらという思いである。

いずれにせよ、本書は、武蔵野書院院主前田智彦氏をはじめ、多くの関係機関および関係者のご理解によって日の目を見ることができた。心から深謝申し上げる次第である。

笹川 博司